

にしてあか／＼と染つた紅葉が、秋風の中に頻りに踊つてゐる。自然は何處までも清く美しい。私は美の極致愛の極致を見出す。日常は宗教等から遠く離れたやうにして生きてゐる。私もいひやうのない廣いふうはりさ、自分を包んでくれる大きな愛を感じずにはゐられなかつた。同時に小さい醜い人間を思ひ出さずにはゐられなかつた。夕の色は無限の空間から押し寄せてあらゆる物象は一つ色の中に消えて行つた。大きな寂寞が天地を支配した。しかし私の心は何さなく明るかつた。そして靜かに眼を閉ちて感覺外にさまよふていつた。

手紙

エツ子

私がnといふ人を知つてから丁度二年になる、nは牛込の西の方に住んで居るある學校の先生である、今迄にも随分色々な人に逢つたけれど、巧な言葉を実行で裏切つたり、實行を愚かしい言葉で打消してしまふ様な人達許りを見て来た眼にはnといふ人は少くとも異彩を放つて見えた、私はnを依頼した、(ある程度迄云ひたい、まだ本當に握手して居ない自分はnに全部をまかせてしまふ事はしなかつた、失望を恐れるさう臆病な態度ではなしに)兎に角nは私が今迄中で一番自分をより多く示し、より多く信頼した人であるそのnには去年の秋郷里に歸つた時手紙をかいて出した、随分主觀的な物であつた、自分の全部を表さなかつた彼女に對して可成りにこみ入つた事迄書いた、私は始に出さうか出さまいかと散々にためらつた、さう／＼ポストへ投げこんだ時、何だか義務をすまじたかのように感じた、二、三日経つて、私の心の一方が何だかそれは

大層いゝ先生だと思つてゐた。尋常二年から四年まで受持たれてその人格さ云ふやうなものには格別崇高だの優雅だの云ふ一つ一つの印象はないけれども、大して偉い人なつかしい先生だと思つてゐた。女學校に入つた時には先生は病氣で病院に居られたが試験の濟んだその足で花屋に行つてむら咲の櫻を買つて持つて行つた。今考へるそれは生花のお花であつたのであまり枝が大きくて殺風景なものであつたけれども私は一生懸命に活けた。小さい硝子瓶はそんなに苦心しても幾度も幾度も上が重いので覆へつて少し先生に恥じかつたが先生は大層喜ばれた。其頃の私は今もその通りであるが全く輕卒で出鱈目の事をする子供であつた。「落着かなくてはいけません。落付かなくてはいけませんよ」といつも繰返して仰つた。既分傲岸な子供であつたので仕舞には、あゝまた仰云ふ。よく解つてゐるのに。さいやだなと思ふ心持がする程であつたが、矢張り十年後の今日も未だこの悪い性質に苦しんでゐる。惜しい事にはこの先生は其時の病氣で亡くなられたが、莫然として好い先生偉い方さ云ふ觀念は今でも消えないでしみる、生きて居られたらと思つてゐる。この學校に入學試験を受ける時にも先生の名に禱り先生の寫眞を懐中して行くのを母は迷信の様だと思つたけれども、それ程強い純な力となり信仰となつて先生の面影は私にある。もし現存して居られたならばそんな欠點を持つて居られたかも知れないと思ふ私の裡にある先生は非常に尊いものである。

今一人はこの寫眞を下さつた先生で女學校で二年程習つたのであるが又私の胸を一生離れない像である。私は殆ど年に數へる程しかお便りをしないけれども大きな私の安心の場所になつて居て、何か

はし出した。nは一体何ぞ思つてゐたらう、私はいくらnにも矢張り弱味は見せたくないのだのにと思ふと手の先迄が穩さを失つてしまつた、そして私の書簡丈が何かポストの中に残されて居る様な氣がして引つこ抜いて來様か位にも思つた、それで私はブル／＼した手で草稿を出して讀んで見た、こんななら心配しなくても好い、思つて文庫の蓋をした、ハタリとしたその音が、何だかnの嘲笑を宿して居るかの様にも響く、私は矢張り落つた手を仕事に出す事が出来ないで、又草稿を出して一二枚目につく様な字を拾つてよんで見た、次の日も亦文庫の蓋は何遍もそ／＼と取つたり閉ぢられたりした、草稿は、こ／＼になつて來た、それでもnからは未だ何さともよりがなかつた、せめてハガキ一枚でもよこして呉れたら、私は思つた、前日、バカらしいから止める、そして水曜日東京へ歸つた時逢ひさへしなれば好いちやないか、私の心が云つた、私は威張つて居様と思つた、けれ共矢張り本當は落着かなかつたし、nには逢ひたいのであつた。

出立の朝まで、こんな氣分が続いてnからは何の便も來なかつたnの重い封書を車の上で受取つた時、私は自分の乗つて居た車の底が落ちたんぢやないかしらんと思つた。

「断片より」

先生の像

うき代

近頃嬉しかつたことは青島に居られる舊師から寫眞を賜つたことであつた。

事があつてもそこへ行けば大丈夫の様な心持で居るけれども間違はないと思つてゐる。此の間、あの怖い不安と寂寞と憂愁とに責められた日の續いた末混亂から逃れる道も知らないごん底から堪らなく叫んだ一枚の葉書が先生の席に飛んだ直ぐ、それは久しい半年に近い御無沙汰の後であつたけれども折かへして數行の文句と御一族の寫眞が來て百万の援軍の様に私に慰めと喜びとを憑したのであつた。先生の手紙には別に何にも具體的のことはなくて、唯船が今出るからこれを送るのみであるけれども私はその中にそれだけの尊い情さ深い理と有難い諭しのあることを思つたであらう。これを持つて其の夜は絶つて久しかつた安らかな眠りに入ることが出來た。

私は此頃そう考へてゐる。眞にその人の肖像を尊く輝しく死ぬるまで胸に刻みつける、そこにある人は何ぞ云ふ尊いものであらうか。自分の胸に常に持つ先生の像は神の様に美はしく清く完全である。さうしても自分と同じ人であるとは思はれない。あゝ私はこんな尊い肖像を誰の胸にほりつける事が出來やう。まつたく先生は神の様に神聖である。この心の像に於て。

私は久しく疲れて居た。やつと今日雨が降つたせいも久し振りで嬉しい様なほ、笑みたい様な氣持になれた。淺い淺い極うはつらではあるけれども。

靜かな夕方だ。私は可愛らしい子供みた様な氣持で鐘がなつてゐるのを一心にきいてゐる。私のまわりにはすっかり何もかも捨てられてゐた。何さなくものに疲れ切つてすっかり馬鹿の様になつてゐる。青い青い空に視覚を奪はれたり、ものゝ音に氣をひかれたり官

覺ばかりの世界になつて、夜までこうしてごつかり坐つたきりで何一つするでもなく費してしまふ。讀むものは積まれた切りで幾日でも塵がたまつてゐる。

ごへ突き込む勇氣もない。身体も少し疲れて肩のこるごがまた初つて來てゐる。私の肩のこる時は自分の意志が弱くなつてゐるごきに違ひないのだが。

散漫な、好い加減な其の日をつゞけるごは、ごんなに厭なものであるか、を痛切に感じながら、少ごも斯うしてほかんご坐つてゐる間はあらゆる知識ごも技能ごも思想ごもすつかり離れてゐるごご思はれない。ごんな時に私ごする事柄はよごごの様な輕い方ごかなくて少ごも熱情が入つて居ない。統一ごない。個人ご持つてゐない。支離滅裂だ。話ごするのにも觀念の内容ごがない。思想の方向ごない。無人格者にも近い——ごんなに私は疲れてゐる。

ごかし悲しいごは思はない。私は矢張りごんな状態ごをつゞけてもこの疲れた座から、明日ご云ふ日ごを待ちあぐんでゐる。明日にはごんな進歩ごがあるご知らない。私はそれでも無意識的にあしたに向つて居る。あした生きる、いろ／＼の生活を想像してごごに美しいものを豫想したり得意の瞬間ごを畫いて見たり、待つて居れば來るものご様に何かごを期待してゐる。

高遠な學説ごをき、思想ごをたづね、藝術ごを追ふ心は一人人間ごにある眞實の心か。あ、眞實の私等ごはごだけごの力強ごを實際ごに感じてゐるのであらう。眞實ごを仰ぐ人道主義の人々ごが、眞實に満足してゐるのをごの點ごの點ごであらう。外來の刺戟ごを勘定ごする事ごばかりを知つて眞個の性をしらべて見ない愚を云はれるであらうけれど、た

て百の敷衍した思想ごを持つ。幾度も自らごを省みて誤りごのない道ごにある事ごを確める。そして健全な、純粹なごの道ごを進んでゆく。智識の方ごも經驗の方ごも可成りの廣ごご深ごごを持つて、や、人々の世界ごに眼ごが開く。人々の批判ごもなし得てそれは正しい様ごであるごそこで若い彼等ごは自分達ごはもう可成りの終局ごに居るごご考へ、自分達ごの生活ごは正しくて眞實性ごで又自分ごの生活ごは離れるものでないご意識する。ごかしもう一段ごの人達ごが進んでゆくごごもつご廣く人々の世界ごが見えて來る。自分の生活ごの影ごが明瞭ごに見えて來る。その時彼等ごの自己ごの生活ごは、既分迂遠ごあるものごを見出し、そしてその方ごに努力ごする。す

るごまた怖しい暴露の第二の時ごが來るのである。
よく眼ごを開いて見よ。そして行つた彼等ごの努力ごは常にその思想ごを裏切つた方ごに向けられその生活ごの現在の目的ごは、意味ごは、否利那ご々々の感情ごよりも現在の生活ごと關聯ごするものは、その人ごの期待ごしない、理想ご以外の形ごとなつて思念ごの中に影ごあらはす。曾て彼等ごの持つた現實ご思想ごの隔絶ごに就いてつた解決ごは甚だ怪しいものごになつて來る。彼等ごの胸中には可成りに發達した思念ご生活觀ごがごちや／＼になつて混亂ごする。曾て持つた小安心ごの上ごにまでも安定ごする事ごが出來ない程、前に比し兩者ごは共に深遠な強味ごを持つてゐる。やはり思想ごと現實ごの衝突ごである。また彼等ごはこの問題ごに突きあつたのだ。併し突き當つたからは抜けなければならぬ。彼等ごはその戦ひごの爲には充分な生活の熱情ごから内的要求ごの力を以つてゐる。

それで彼等ごは前より、より多く苦しみより多く考察ごしてごごに又新しいものごを見付けすには措かない。それは即ち第二期の現實ごと理想ごの衝突ごである。即ちさきごは單なる生活現實ごそのものご、思念

ごは幾度も全ご失望ごを繰り通してゐるに過ぎない。恥しい。幾多の否定ごを願つて汗ごが出る。その前に私は、今ごのみちめな肯定ごを指して恥ぢればならぬ——私は今日ごはほんごに疲れてゐる。

第二期

生活ご思想ごの別箇ごになつた儘ごを持つてゆく事は皆ごの多い苦しごごである。併しそれを近づけ更に生活ごの中に思想ごを見出し思想ごの中に生活ごを有する様ごになるのはもつご苦ごく惱みごの多い利那ごを通らなければいけない。併し人は眞のごごまで行かれば人格者ごではない。ほんごの生き方ごでない。ごごに山頂ごに漑えられた湖ごの様ごな静かさご平和ごその人の尊い人格ごの神秘ごがある。ごごまではごうして行かればならぬ。ごんな微小なごのからでも。

若い人々ごは叫ぶ。現實暴露の悲哀。幻滅の憂愁。その弱い慙れな心は動搖し今ごにも沈む様な危態ごを感じ、其の細い純な神經ごは狂ふ様に傷いた様な激痛ごを覺えていた／＼しい涙ごは、視覺ごをさぎつて彼等ごの世界ごは一時昏らくなる。併し聰明な人々ごは間もなくそれは雅な生活ごのまだ經驗ごにも思索ごにも其れまでごに伸びてゐなかつたのであつて、その現實ご思想ごの懸隔ごは、やがて經驗ごが伸びそれが思索ごの發達ご共に思念ごの中に現實ごが容れられ、やがてごごに完全な理想ごが作られる日ごのある事ごを知り得て想像ごする。そして彼等ごは驚くべき忍耐ご、賞讃ごすべき勤勉努力ごで不斷ごにその方ごに邁進ごする。ごごに於ては實に山の様な、自分の見窄らしごや不理解ごに對する苦しみや或時は寂寥ごに或時は孤獨ごに失望ごに、殆ど絶望ごの淵ごにまで立つ様ごな多くの困難ごがあるけれど、よく耐へよく努めて息まない歩みごをゆく。彼等ごは可成り多くの經驗ごを得る。彼等ごの聰明ごからその經驗ごに就い

想像ごよりなる空想的の期待ごの問題ごであり、この第二期ご云つた今ごの現實生活ごの理想ご、純粹なる思念ご的理想ごの問題ごである。即ち現實ごに即した理想ご、生活ごのかくあるべきごの理想ご、純精神的理想ごの差、即ち理想ごと理想ごの二つの相違、二つの闘ひごから起るものである、人々ごはこの兩者ごを確實ごに持つてゐる。そして理想ごはごごらも完全性ごのものであるから正邪ごも又主従ごも見出し得ないご又自分の經驗ごや思念ごの缺陷ご云ふ事ごも不充分ご不到達ご云ふ事ごも感じ得ない。この兩者ごの矛盾ごは甚だ苦しいものであるけれど、努める人々ごはごうかして一方ごの血路ごを見出す。或物は兩者ごを調和し或物は一者ごを取りそして其處ごから踏み出した歩みごの一足一足ごその人の眞の誤らざる人生ごの色彩ごである。意味ごである。ごごからほんごの人生ごが始まる。價値ごの評価ごもごごから始まる。

色んな種類の苦痛ごは多い。併しこの第二期ごの苦しみ程大きく深くまた意義ごあり價値ごあるものごはない。人々ごはこの苦しみごからわけた時に何時ごも荒爾たる人ごになり得る。人格者ごである。その人の心ごには山頂ごに漑えられた湖ごの様ごな静かさごと平和ご、その尊い人格ごの神秘ごがある。ごごまではごうして行かればならぬ。ごんな微小なごのものごらでも。

彼女の日記より

やみ路

境遇ごが常に自由な所にはおかれなかつた。系累ごが常に彼の行爲ごを縛らうごとした。健康ごも彼の意ごの儘ごによくなかつた。それがAごであつた。